

## セクシャルスクール スピンオフ

### ヒーリングプレイス サンプル

暑さのあまり、セミさえも静かな田舎の夏。

県境の山の中腹にその屋敷は建てられていた。

応接間のテーブルには手のつけられていないアイスコーヒーが二つ、汗をかいてコースターを濡らしている。

白いシャツにスラックス姿でソファに身を預ける清瀬きよせの前で、藤島ふじしまが膝に手をついて頭を下げた。

「ケアを頼みたいMタチがいる」

清瀬は、うかがうように見上げてくる藤島に鋭い視線で先を促した。

気圧された様子で藤島が続ける。

「……春に学校うちを卒業して買われていったが、虐待を受けて勃起不全になった」

藤島が理事長を勤める『セクシャルスクール』は、若いゲイの男の子たちが性行為を学ぶ全寮制の学校だ。タチ・ネコクラス、M・Sクラス、ドM・ドSクラスと進級していく。就職先はほとんどの場合、系列の風俗店もしくは裕福な個人の家になる。

「学校うちでケアできないほどひどいのか」

通常、就職先からトラブルの連絡があった場合は、既知の人間が適切なケアをするべく学校が受け入れることになっていた。

藤島がうなだれながら首を振る。

「不特定多数がいるところは無理だ。いられない」

どうやら深刻な状況らしい。視線でさらに先を促す。

「屋敷で見世物にされていた。勃起すればムチで打たれて……奉仕系だったのに」

「……可哀想に」

Sを名乗る者の中には、相手がMなら何をしてもいいと考える者がいる。そんな人間はSではなくただの愚か者だ。

「いつも頼ってばかりで申し訳ないと思ってる。だが清瀬にしか頼めない。どうか――」

## 正嗣

「やあ。ようこそ」

「正嗣、彼が清瀬だよ」

翌日。

玄関前まで迎えに出た清瀬に、体格のいい男が感情のない目で黙礼を返した。

待っていても、口を開こうとはしない。

その様子を隣で見っていた藤島が言葉を添えた。

「彼は正嗣だ。まさつぐよろしく頼む」

「ああ」

「じゃあ俺はこれで。必要なものがあれば連絡してくれ」

清瀬は車に乗り込む藤島を一瞥すると、正嗣に笑みを向けた。

「暑かっただろう。おいで。飲み物は何が好きかな」  
リビングに連れていき、ソファに正嗣を座らせてからキッチンに立った。食器棚を開けながら、清瀬は藤島から渡された資料を思い返した。

正嗣の年は三十一で、清瀬と藤島よりも二つ下。筋トレが趣味で、高校、大学とラグビーをしていた。

行為のポジションはMのバリタチ。ネコの経験はなく、奉仕を好む。藤島が理事長を務めるセクシャルスクールへの入学が二年前で、目的は家族の借金返済のためだった。成績は全体を通して平均的だったが誠実そうな犬顔としっかりした体格により、入学から半年後——つまり今から一年半前に客からの指名が複数入り、その中で一番給料が高額だったところに就職した。

「コーヒーよりお茶の方がいいかな」

五メートル先に声を掛けるが、正嗣は震えるように小さく体を揺らすだけだった。もしかして就職先では声を発することも許されなかったのではないか——清瀬は歪みそうになる表情を平常に保ち、グラスを二つテーブルに運んだ。

「アイスコーヒーと麦茶だ。どちらでも好きな方を」

正嗣は手を伸ばさない。緊張しているというより、心を閉ざしているように見えた。

怯えさせぬよう、正嗣の斜め向かいの一人掛け用ソファに腰を下ろす。

「……まず、金のことだが」

清瀬の言葉に、膝の上で握られた正嗣の手がぴくりと動いた。

「藤島——スクールの理事長が先方と話してる。その結果がどうなったとしても、補償はされるから安心していい。補償元がどちらになるかというだけの違いだ」

正嗣の体はまだこわばったまま。

「君は被害者だ。期限は考えず、のんびりと心と体を癒やすのが仕事だよ。ここでの生活費も学校から出るから気にしないでいい」

加害者は就職先と、就職先の本性を見抜けなかった藤島である。

「飲み物を飲んだら家の中を案内するよ」

ようやくゴツゴツした手が動いた。より近い方にあった麦茶を取る。清瀬もそれを見届けてからコーヒーに手を伸ばした。

「——で、ここが寝室だ。ベッドは広いし、私の寝相は悪くない」

言外に一緒に寝ることを伝える。

「はい」

当初頑なに黙っていた正嗣は、お茶を飲んでいるうちにぼつりぼつりと言葉を発するようになっていた。その様子からわかったのは、元々が寡黙なタイプだということ。ただ静かに、Sネコの言うことを聞くのが性に合っているらしい。

「奥のドアは風呂とトイレだ。着替えなどはクロ―ゼットにある。藤島から当分の身の回りのものは送られてきているが、足りないものがあつたら遠慮なく言いなさい」

「はい」

「疲れたかな。外は暑いし、庭の案内は明日にして今日はもう休もうか」

ほとんど山の中と言えるような場所だ。木陰が多いので街中に比べればずっと涼しいが、正嗣の肌は異様に白い。藤島に保護されるまで、おそらく外に出ることも許されてこなかったのだろう。気候にも少しずつ体を慣らしていかなくはならない。

風呂に案内しようとする清瀬に、正嗣は首を振った。

「ご迷惑でなければ」

ケア対象の子の希望は、可能な限り叶えることにしていた。特に今は清瀬自身とこの場所を知り、安心してもらうことが最優先だった。

「じゃあ、少し出ようか」

連れだって傾き始めた日の下に出る。リビングの前を通って玄関の反対側に向かうと、家庭菜園と小さな池が見えてくる。

「食料は自給自足ですか」

「いや、この畑はそんな大層なものじゃないよ」

人と接することに疲れた子は、植物に癒やしを求めることがある。そのために用意しただけの場所だった。

しかしいつ依頼が来るかはわからない。来るときは

交代するかのように続々とやって来るし、来ないときは半年や一年ぽっかり空くこともあった。最後にここに人がいたのは三か月前まで。それ以降、種や苗が植えられることのなかった畑は強い夏の日差しを浴びて乾ききり、白っぽくなっていった。

視線を畑から外し、山に向ける。その意識の切り替えに正嗣が気付いたことを、気配で察知してから尋ねる。

「虫は嫌い？」

「いえ……？」

「じゃあ、明日からは朝の涼しい時間に散歩しよう。この辺り、歩いていける範囲は私の土地だから気にすることはない」

正嗣は静かに頷くと、視線を池に移した。

「何かいますか」

「鯉がいるよ」

ここに来た子が入ってしまわないように、あえて入れているだけの魚を、正嗣は物珍しげに覗き込んだ。

「正嗣は、生き物が好き？」

正嗣は清瀬を振り返ると、数瞬の間を置いてから曖昧に頷いた。今は好き嫌いというような感情は封印されているのかもしれない。

「たまにリスが遊びに来るよ」

正嗣が視線を近くの木に向けた。しばしじっとしていたが、リスの姿を見つけれなかったのか、どこか残念そうに視線を池に戻した。

「ぐるっと家を一周して中に戻ろうか」

正嗣は黙って清瀬の後ろを歩いた。

「そろそろ風呂に入ろう」

正嗣が一瞬たじろいだ。

清瀬がバリタチであることは、気配から感じ取っていただろう。相手<sup>ネコ</sup>をさせられると思ったのかもしれない。

正嗣は、しかし何も言わずにソファから腰を上げて、食後のコーヒークップを清瀬のものと合わせてキッチンに運んだ。

キッチンの流しを挟んで向かい合う。正嗣はスポンジを手に使っていた。

「私はタチもネコも気にしないタイプだが、タチをネコにしようとは思っていない」

顔を上げた正嗣が瞠目した。しかし自身の感情を読まれたと悟ったのか、気まずそうに視線を下に戻す。

「これから一緒に生活するんだし、裸同士の付き合い合いつてやつだよ」

それは、体の傷を確認するための口実だった。心の傷は時間をかけて見極める必要があるが、体の傷は一目瞭然。治った傷もあるだろうが、古いものが残っているようならそれはそれでひとつの目安になる。

「洗い物、させて悪いね」

「いえ」

寡黙な子だ。しかし醸し出す空気が穏やかだからか、居心地の悪さを感じることはない。

グラスを洗う指の動きも繊細で、まるで主人の体を清めているかのように見えた。

正嗣は、脱衣所に入ると戸惑うことなく服を脱いだ。藤島からの書類によると、正嗣はラグビーをしていたはずだ。骨格はいいがあまり筋肉質ではない——のは、やはり一年半虐待を受けていたからだろう。

「運動は好き？」

清瀬も裸になって浴室に入る。広めに作らせた風呂は、大の男が二人入ったくらいでは圧迫感もない。

「はい。ラグビーをしていました」

知ってるよ、とは言わずにおく。

「うちにも運動用の部屋がある。腹筋台や懸垂用のバーがあるくらいだけど、好きに使うといい。正嗣には物足りないかもしれないが」

言いながら立ち位置を変え、正嗣の全身に目を走らせる。腕や背中、腹に尻、足……顔を除く全身にムチにやるケロイドが残っていた。それだけでも痛々しいが、だらりと垂れた大きなペニスと真つ赤に腫れあがり、ところどころ切れていることが遠目からでもわかった。

「……痛いね」

清瀬があえて視線をそこに留めて言うのと、正嗣は脇に下げた手をぎゅっと握ってこぶしを作った。陰部を隠すことは許されない——それは学校でも教わることであった。

「あんなに歩かせるべきではなかった。すまなかった」

「いえ……」



少し移動するだけでも下着がこすれて痛かっただろう。風呂も怖かったに違いない。

「風呂から出たら手当てをしよう。だがその前に――」  
麻酔を打ってやった方がよさそうだった。ペニスは水で流すだけにしても痛むだろうし、体の中心部だ。どんなに気を付けても、シャンプーやボディソープが触れてしまう。

「注射は怖いかな。細い針で麻酔をかけよう」

正嗣のこぶしがびくりと動いた。散々ムチで痛めつけられたペニスに針を刺される――針責めも経験しているのかもしれない。ようやく痛みを与えられることから解放されたと安堵していたところにこの清瀬からの申し出は、恐怖をよみがえらせたただだったかもしれない。しかし麻酔針の方が、泡に触れ続けるよりは痛くない。

「少し触れただけでも痛むだろう？ 私は医師免許を持つているし、麻酔は二、三時間で切れる副作用のないものだ。でも怖ければしない。正嗣がこのままがいいと言っても、信用されていないなんて思わない」

まだ信頼関係など築けていないのだから、信用も何もない。しかし断ってもかまわないということは、口にして伝えてやらなければならない。

言葉のひとつひとつに細心の注意を払う。

この時間、空間が清瀬は好きだった。誤った知識や暴力による犠牲者に安心を与え、自分の手による回復を見守る。そしてその後、本物のSMを教えたい。

正嗣は黙って視線を伏せていたが、「お願いします」と小声で言った。

「じゃあ、取ってくる。一人で待っていていられるかな」

三十路を過ぎたタチ。だが清瀬にとって、心に傷を負っているMには年齢もポジションも関係がない。甘やかしてやりたい。

しかし正嗣は、そんな清瀬の嗜好を知らなかった。困惑を含んだまなざしで清瀬を見る。

「……すぐに戻るよ」

麻酔は脱衣所の棚に用意してあった。薬剤名を確認してから浴室に戻る。

正嗣は、所在なげに洗い場の端に立っていた。

「椅子に座って」

視線で示すと、正嗣は無言のまま腰を下ろした。その正面に膝をつき、ピンポイントで殺菌する。アルコールがしみたのか、正嗣の太腿が跳ねるように動いた。

「すぐに終わるから」

正嗣の腹筋の溝が深くなった。覚悟が決まったらしい。さっと注射針を刺し、麻酔をかける。

針を抜くと、正嗣はほっと息を吐いた。時間を置かず注射針を脱衣所の専用のごみ箱に捨てて戻る。

「どう？」

「変な感じがします」

「痛みは？」

そっと触れて麻酔の効き具合を確認する。

「もうありません」

「よかった」

清瀬は正嗣の様子を注意深く観察しながら、傷だらけの肌を洗った。

正嗣は常に静かだった。風呂上がりに傷の手当てをした時も、ベッドで腕枕をすべく清瀬が腕を差し出したときも、声を出さずにただ言われるがままになっていた。

正嗣の寝息を確認してから、清瀬はそっと寝室を抜け出した。

書斎に入り、正嗣の資料をしばらく読んでから藤島に架電する。

「鎮痛剤を飲んで寝たよ」

『様子は？』

「落ち着いてる。無口なのは元からだろう」

『怪我の具合は』

「全身にケロイド。特に性器がひどい。腫れあがってる」

どうやらこちらは把握していなかったらしい。吐き捨てるような汚い言葉が漏れ聞こえる。

「外を歩いた時に自然に興味があるようだったから、環境としてはうちでも悪くないだろう」

『わかった。引き続き頼む。何かあればいつでも電話を。金は振り込んである』

清瀬が電話を切って寝室に戻ると、ベッドが空になっていた。慌てて薄暗い室内に目を走らせると、壁際にのそりと立つシルエットが見えた。

「正嗣」意識して柔らかない声を出す。「起こしてしまっ  
たかな」

正嗣が清瀬を見た。その目は明らかに怯えていた。救  
いを求めているようにも見えたし、諦めているように  
も見えた。

「暗いのが怖かったかな」

寝顔を確認できるように、常夜灯はつけていた。しか  
し正嗣にとっては知らぬ場所。

目が眩まぬよう、リモコンで常夜灯の照度を上げる。  
室内がじゅうぶん見える明るさになると、正嗣の肩か  
ら力が抜けたのがわかった。

正嗣は、この部屋から出ることもできた。清瀬を探し  
に行くことも、家を飛び出していくことも。けれどどち  
らもせず、ただじっと壁際に立っていた。

(ああ……)

どうしたらいいかわからないほど、正嗣の心は疲  
れきつてしまっている。そう思うと、清瀬の胸が疼いた。

「怖くて不安な思いをさせてしまったね」

謝りながら、そつとこぶしを手取る。ずっと握りし  
めていたのか、ひんやりとしていた。

「おいで。このまま寝られるかな。何か飲もうか」

酒は傷に障る。それならホットミルクの方がいいか。

しかし正嗣は答えない。

「水でいいかな」

正嗣を置いてキッチンには行けそうにないと判断し、  
ベッド横の冷蔵庫からペットボトルの水を二本取り出

す。キャップを開けてから渡すと、正嗣は頭を下げてそれを半分ほど一気に飲んだ。

「正嗣は、酒は好き？」

「あまり飲んだことはありません」

「じゃあ、怪我が治ったら乾杯しよう」

正嗣がキャップを閉めたのを確認し、ベッドに入る。隣に寝転んで抱きしめると、腕に動揺が伝わってきた。さっきはなかったものだ。

「ここでの、約束」

正嗣はじつと言葉の続きを待っていた。

「『タチなのに』という考えはしないこと」

「それは——」

「正嗣は正嗣。ただそれだけってこと。タチだから甘えちゃいけないとか、泣いちゃいけないとか、そういうのはだめだよって」

「……旦那様はそういう相手がお好みですか」

正嗣からの質問。それは無意識のうちにある、清瀬とこの場所への警戒。そしてこの家で生活しても害がないかどうかの判断材料の収集。

それでも、心を閉ざすのではなく訊いてくれたことが嬉しかった。

「Mならどんな子でもいいっていうか、Mの素質が少しでもあればSでもいいかな。プレイの好みは奉仕でも痛みでも羞恥でもなんでもいい。だからタチネコも気にしない」

「すごいですね」

「藤島には節操なしと言われるよ」

「理事長とは」

これは単なる好奇心だろう。少しずつ正嗣の心が清瀬の方に向いてきつつある。

「子どもの頃からの悪友、かな」

正嗣はそれ以上、何も訊きはしなかった。頭を撫でいると、次第に寝息が聞こえてくる。今日は気を張っていただろうし、ここに来るまでは痛みもあつてずっと寝不足だったことだろう。

（少しでも長くおやすみ）

正嗣は夜中、幾度となく目を覚ました。ビクンと体を跳ねさせて。

清瀬はその度に正嗣を抱きしめ直して頭を撫でたり、傷の位置を思い出しながら背中の無事な箇所をトントンと叩いたりし、時に優しく名前を呼び、ここが怖いところではないことを伝えた。

（この様子だと、寝ているところに暴力をふるわれたこともあるな……）

安眠できていない。しかし清瀬が根気よく寝かしつけると、正嗣は五分から十分、三十分と長く眠れるようになった。

（正嗣……）

かわいいM。愛おしいM。

一方的にいたぶるなど、いったいどうしてそんなことができるのだろう。

Mは、健気に身をゆだねてくれる存在だ。だからこそ感謝と愛情をもって接するのだ。その気持ちが変わるからこそ、Mは痛みや苦痛に耐えてくれる。大切な心と体を捧げてくれる。

(もう、怖い思いは絶対にさせない)

清瀬は正嗣の髪に鼻をうずめた。

## 二日目

結局、二人がベッドを抜け出したのは夜に近い夕方、日が落ち始めた後だった。

細切れの睡眠しか取れていなかったが、正嗣の表情は昨日よりもどこかさっぱりしているように見えた。

「腹も減ったが、先にシャワーで寝汗を流そうか」

薬も塗り直さねばならない。

正嗣はおとなしく清瀬に従うと、服を脱いで全身をさらした。

ペニスに麻酔をかけ、手早く洗う。人に体を洗われることはまだ慣れないようにで居心地が悪そうではあったが、正嗣は清瀬に身を任せ、おとなしくしていた。

「いいこ。終わったよ。まだ湯舟はやめておこう」

柔らかいタオルで全身を拭いてやり、傷のひとつひとつに薬を塗っていく。最後にペニスに包帯を巻くと、正嗣はほっと息を吐いた。

「ありがとうございます」

「どういたしまして」

「もう、明日からは自分で浴びます」

「私が一緒に入りたいたんだよ。付き合ってくれたら嬉しい」

正嗣が何かを言いかけ、口を閉じた。

「ん？」

「あの、ご主人様は——」

「ご主人様？」

昨日は旦那様と呼ばれた。清瀬が問い返した瞬間、正嗣の全身が緊張に震えた。

「っ……も、申し訳ありません。主従契約も——」

言わんとしていることに気付き、慌てて首を振って正嗣の肩を支える。

「ああ、違うよ。嫌だったわけじゃない。ただ、正嗣の言うとおり主従は結んでいないからね。そんなかしこまる必要はないんだよ」

「あ……」

「だが、呼び方を決めないと生活しづらいね。正嗣が呼びやすいもので、なんでもいいよ」

正嗣はしばらく黙った後、「……旦那様」とつぶやくように呼んだ。

静かな夕食を終えて痛み止めを飲ませると、清瀬は正嗣の手を引いてベッドに入った。

まだベッドを出て四時間ほどしか経っていなかったが、規則正しい生活は心身の健康の第一歩。しかしまだ、



朝は起こすことはせずにいくらでも寝かせておいてやりたい。そんな気持ちで腕を伸ばすと、正嗣は抵抗することなく従い、清瀬の腕に収まった。

「旦那様」

「うん？」

「……おやすみなさい」

「うん、おやすみ」

寝不足も続いていたはずなのだ。悪夢を見ない限り、眠っている時間は心身の傷も回復させる。

正嗣は清瀬の想像どおり、三十分もすると穏やかな寝息を立て始めた。

寝不足だった清瀬もすぐに眠りにつき、その夜は正嗣もほとんど目を覚ますことなくぐっすりとし身を休めた。

## ユタカ

「今日は少し外を歩いてみようか」

まだ朝の七時だった。しかしこの一週間しつかり眠れているせいか、正嗣の顔色はいい。勤め先ではほとんど日に当たることさえ許されなかったのだろうことは、その白い肌からわかっていた。健康に必要な食事と睡眠に、日光浴。木陰が多いので、日に当たりすぎることもない。

「まだ歩くとベニスが痛いかな？ もう少し治ってか

らにしようか」

「いえ、行きたいです。持ち物はありますか」

「飲み物だけ持っていこう」

冷えたペットボトルのお茶をそれぞれ一本ずつ手にして外に出る。時間のせいかな、まだ蝉もほとんど鳴いていない。

「いい天気だ」

「はい」

「戻ったら洗濯をしようか」

「はい」

返ってくる言葉は少なかったが、正嗣の視線は方々に向けられていた。周囲に興味を持っている。

清瀬は内心で安堵の息を吐いた。心を癒やすのに大事なのは言葉の数ではない。

「この先に川があるよ。釣りもできる。したことはある？」

「学生時代に少しだけです」

「道具はあるから、やりたいと思ったら行こうか」

「はい」

朝の涼しい山の中を三十分ほどのんびりと歩き、二人は家に足に向けた。そろそろ屋根が見えてくる、というところで車のエンジン音が聞こえた。その瞬間、正嗣の足がぴたりと止まる。似た車のエンジン音を聞いて過ごしていたのかもしれないし、迎えが来たと思ったのかもしれない。

「大丈夫。おいで」

清瀬は正嗣の手を取ると、甲を数回撫でてから歩き始めた。

「たぶん、藤島だと思う」

「理事長……ですか」

「うん。追加の荷物を届けに来たのかも」

しかし、清瀬は内心では首を傾げていた。金は振り込みで、連絡もなく藤島が家にやってきたことはない。家を出る前に携帯も確認していたが、連絡は入っていないかった。

方向をわずかに変え、清瀬は駐車場側に出た。

「清瀬！」

そこにいたのは予想通り藤島だった。

「なんだ？ 突然」

「悪い……」

ちら、と藤島が正嗣を見た。握ったままの正嗣の手が  
一気に冷えていく。

「正嗣、大丈夫だ」

清瀬の言葉に藤島がハッとした様子で頭を下げた。

「すまない、違う、迎えに来たんじゃないよ。正嗣とは  
別件で——」

「別件？」

正嗣の手から力が抜けたのと同時に嫌な予感を覚え、  
清瀬は鋭い目で藤島を見た。

「なんだ、言え」

「……すまない、もう一人頼みたい」

はあ？ という言葉を飲み込み、無言のまま藤島を

見つめる。

「ポジションは？」

もしSネコだったら引き受けることはできない。先に受け入れた正嗣を優先するのは当然のことだった。

「Mタチ」

さすがにそこは考慮したか——しかし、絶対数の少ないMタチが二人続けて、しかもこの短期間に連れてこられるということが異常だった。

「ユタカだよ」

「——は？」

「ユタカだ」

藤島が同じ名を繰り返した。

（ユタカ……？）

信じられない気持ちだった。

ユタカは二年前にもここで半年ほど過ごし、心を癒やしていった子だった。Sネコのパートナーとして就職したはずだったのに屋敷にいたのはSタチばかりで、ユタカは蔑まれ、玩具扱いされて深く傷つき、ここに連れてこられたのだった。

「ユタカって、あのユタカか」

「ああ……」

「何があった?!」

怒りで頭が沸騰した。心に傷を負い、どうにか生活ができるように立ち直らせて見送ったのに、またひどいところにあてがったのか。

「あ……その」

藤島がちらりと車を見た。スモークの貼られた窓からは、車内の様子はうかがえない。しかし清瀬は車に走り寄ると、勢いを静めてからそつと後部座席のドアを開けた。

フラットにされたシートの上で、薄いパジャマを着たユタカが膝を抱えて転がっていた。

「ユタカ！」

ここで見送った時よりも、その体は一回りも細くなってしまうていた。そつと背中に触れ、驚かせていないことを確認してから抱き起こす。

「ユタカ、私だ。わかるかな」

しかしユタカは清瀬を見ようとはしなかった。感情を失った目でぼんやりと遠くを見つめている。

「ああ……つらかったね」

車から降ろし、正嗣に「戻ろう」と声を掛けて玄関に向かう。今は、藤島の顔は見たくなかった。

正嗣が後ろをついてくるのを心配で確認し、足を止めて隣に追い付くのを待つ。ユタカが加わったが、正嗣をないがしろにするわけではない。そんな気持ちを込めていた。

「正嗣、この子はユタカ。以前にもここにいたことがある」

返事はなかった。当然のことだ。正嗣とて心に深い傷を負っている。まだ短い時しか過ごしていないが、二十四時間、清瀬のケアを一身に受けていたのだ。そこに新たな、しかも清瀬の既知の人間が現れたら思いは複雑

なはず。

「後でメールする！」

玄関に入る直前、背後で藤島が叫んだ。しかし清瀬は頷くことも振り返ることもせず、正嗣を促してリビングに向かった。

心を失った状態のユタカを抱いたままソファに腰を下ろした清瀬は、所在なげに壁際に立った正嗣を呼び、手を引いて隣に座らせた。

「ユタカは正嗣と同じく奉仕系のMタチで、年は正嗣の二つ下だ」

先ほどMタチであることは聞いていたからか、正嗣に怯える様子は見られなかった。しかし、どうしたらいいのかわからず戸惑っているふうではあった。

「ユタカ、彼は正嗣。ここは私の家だよ。覚えているかな」

ひとまずユタカに声を掛け、頭を撫でる。

これまで二人同時に預かったことはなかった。しかし正嗣もユタカも、他の施設に任せる気にはなれない。幸い二人とも同じ奉仕系のMタチ。心根も優しいタイプなので、トラブルが起ころうことはないだろうが――。

（せめてもう少し後だったら……）

正嗣と信頼関係を築けてからならよかった。しかし今それを考えてもしかたがないと思ひ直す。

反応を返さないユタカの長い髪をひと撫でし、丸まった背中を抱いてからもう片方の手で正嗣の手を

しっかりと握る。

その時、呼び出し音を消した固定電話がピーと音を立てて紙を吐きだし始めた。ユタカをソファに下ろし、ファックスを取りに立つ。

藤島だった。おそらく携帯を見る余裕はないと考えたのだろう。

そこには丁寧な詫びの言葉と、ユタカの置かれていた状況と現在の体調が書かれていた。

(失声症……)

原因は、輪姦だった。タチだというのに、拘束されてSタチのおもちゃにされていた。

清瀬が憤っても意味はないとわかっていても、怒りを禁じえなかった。相手はもちろん、そういうやつらだと見極められなかった藤島に対して。

ぐっと手を握って怒りを抑え、紙をポケットにしまつてからソファに戻った。

ユタカは清瀬が下ろした状態のまま、少しも動いてはいなかった。

再度抱き上げて膝の上に抱え、正嗣の手を握り直す。

「……外に」

正嗣が腰を浮かせた。

清瀬はそれを引き留めることなく、ユタカを両手で抱いて立ち上がった。

「うん、じゃあ川に行こうか」

正嗣が席を外そうとしていたことは承知していた。しかしそれを認めては、追い出すことと同義になる。だ

から当然のような顔で、誘いを受けたふりをした。

「いえ、一人で――」

「どうして？ 一緒に行こう。釣り道具も持っていないか」

ユタカが存在が、正嗣と清瀬の関係を变えることはない、と伝えたかった。

「あ、けどエサがあったかな……ルアーで釣れるといいんだけど。スコップも持っていないか」

前に釣りをした時は、確か藤島に生餌を持ってこさせたのだ。しかし今は何も用意がない。

「スコップ、ですか」

正嗣は釣りに行く気になったようだった。ちらりと心配そうにユタカを見たが、言及はしない。

「虫、穴を掘ればいるかもしれないから」

清瀬の言葉に、正嗣は瞬きを繰り返した。

「どう？ 魚、いる？」

ユタカを抱いて座ったままでは、川底を覗き込むことはできなかった。正嗣が身を乗り出し、魚影を探す。

「いました」

「よかった。とりあえずルアーで頑張ってみて」

正嗣は学生時代に少しやっただけと言っていたが、ときばきと準備をするそ竿を振った。その様子はさまになっており、手慣れていることを表していた。

「上手だね」

「いえ……」



どこか照れたように視線を背けると、正嗣はじつと川に向き合い始めた。

「ユタカ、正嗣が魚を釣れるように一緒に虫を探そうか」

反応はない。しかし声掛けをやめるわけにはいいかない。

「岩の下に何かいるかな？」

清瀬自身は釣りをしなかった。だからどのような虫がエサになるかはわからない。

ユタカの体を横に下ろし、目の前に転がる人間の頭サイズの石をどかす。しかし動くものは何もない。内心、そのことにほっとした。

ルアーで何か釣ればいいが、と思った時、清瀬に寄りかかっていただけのユタカが動いた。

「ん？ ユタカ？」

パンパンと手を払い、ユタカを膝に乗せる。

ユタカの口が「だん」と動いたように見えた。

「ああ……そうだよ。私だ」

旦那様。正嗣だけでなく、ここに来た子はなぜかみんな習ったかのように清瀬を旦那様と呼んだ。

「覚えててくれたんだね、嬉しいよ」

ユタカの返事はなかったが、視線がちらりと正嗣の方に向いた。正嗣もまた、ユタカを見ていた。

「ユタカ、彼は正嗣。二週間前にうちに来てくれた。ユタカと同じMタチだよ」

## 二人の時間

二十二時半。

正嗣、おいで――。

清瀬は視線だけで正嗣を呼ぶと、手をつないでベッドを抜け出した。

ユタカは眠りが深いので、一度寝たら朝まで目を覚ますことはない。

最初こそどうなることかと思っていたが、三人での生活は驚くほどスムーズに進んでいた。

年下のユタカを、不器用ながらも正嗣がさりげなく支える。しかしユタカの前では正嗣が清瀬に甘えられないふうだったので、ユタカが寝た後、二人の時間を作るようにしていた。

トレーニングルームに入り、正嗣をきつく抱きしめる。

正嗣が清瀬を抱きしめ返すことはない。けれど、鼓動は落ち着いている。

「明日はまた釣りに行こうか」

「ユタカが退屈では」

「そんなことないよ。正嗣がたくさん釣れるように、ミズ探しを楽しんでる」

「旦那様がおつらいのでは」

どうやら、あまり虫を好まないことに気付かれています。隠すことなく苦笑する。

「生餌か、もう少しいいルアーを買おうかと思ったんだけど、それだと仕事を失ってユタカが寂しがるからね。それに釣れた時の正嗣の嬉しそうな顔を見れることを思えばなんでもないよ。ミミズくらい」

返事がないので体を離すと、正嗣は困った表情を浮かべていた。このままでは釣りをやめると言い出しかねない。

それに、今日はミミズの話をしたかったわけではない。

「それより、そろそろつらいんじゃないかな」

正嗣がうつむく。それだけで、清瀬がいわんとしていることを正嗣自身も意識していたのだとわかった。

正嗣がここへ来てもうすぐ一か月。ずっと勃起不全だったのが、ここ数日は、寝ている間に生理的な勃起をするようになっていた。

清瀬はベッドで足に硬いものが当たったことで気付いていたが、正嗣にも自覚があったのなら先へ進んだ方がいい。

「自分ではいじってみた？」

「……いえ」

怖いのだ、とすぐにわかった。それにその恐怖が、ここになじんでくれたからだという喜び。正嗣は、治ったらここを出て行かなければならないと思っている。

「勃起ができるようになって、前のところに戻る必要はないんだよ」

ハッとした表情で正嗣が顔を上げた。

「ここで預かる条件の一つに、原因となったところと縁を切らせるといふものがある。その手続きは理事長である藤島の仕事だ」

本当は、もっと早くに話して安心させてやりたかった。しかしタイミングを見誤ると、前の場所を思い出して傷を深くしかなえない。今回はこのタイミングで正解だった。

「そうなんですか」

「まだ話し合いが続いているみたいだけど、絶縁が決まらない限り正嗣はここからは出さない。どちらにしてもこんな短期間でここを出る子はいないよ」

過去、最短で出たのが二か月だと伝えると、正嗣は明らかにほっとしていた。

「もっと早く伝えるべきだったね。すまない」

「いえ、そんな……」

「正嗣は優しいね。それにかわいい」

頬に手を添える。正嗣は目を見開いたが、ゆっくりと表情を戻した。

「ん？ ユタカ、勃起したね」

左にユタカ、右に正嗣。ソファで三人並んで朝食後のコーヒーを喫していると、ユタカのズボンがテントを張っていた。声を出せないユタカが返事の代わりに足をすり寄せる。

（正嗣はまだ起きている時に勃起はできない……）  
ユタカは羞恥プレイを好んでいた。だからこの場で

射精させてもいいが、それを目の当たりにした正嗣はどのように感じるだろうか。

（正嗣は羞恥プレイよりも奉仕を好む……）

右手で正嗣の手を握り、体温と発汗を確認しながら表情をうかがう。

「正嗣。ユタカは恥ずかしいところを見られるのも好きなんだ。見てやってくれるか」

初めての、指示に近い性的な頼み。正嗣が唇をわずかに開いた。それを肯定と受け取る。

「……正嗣。床に座ってユタカの射精を見なさい」

言葉を変えると正嗣の目に肉欲が浮かんた。スツと腰を上げてユタカの正面に膝をつく。

「いいこだ。偉いね、正嗣」

頭を撫で、その手を頬にすべらせる。唇を親指で撫でると、まるで次の指示を待ち望むかのように下唇が開いた。

「ああ……正嗣も興奮してるね」

正嗣のペニスも起ち上がり、ズボンを膨らませていた。

「ユタカ、おいで。久しぶりに抜いてあげよう。怖いことはしないよ」

ユタカの腕を引き、背面で清瀬の太ももの間に座らせる。ズボンと下着をずり下ろしてペニスを取り出すと、正嗣が目細めた。

「正嗣、しっかり見ていなさい」

「はい」

二人同時に性の壁を越えるとは。しかしこれは幸運だった。

「ユタカ、ペニスを握るよ」

腕の中でユタカが顎を引いた。ぎゅつと清瀬の膝を掴む。

「そう、怖くない。まずは頑張って射精してみよう。怖かったら私の足を叩いて」

左手でユタカの上体を支えながら乳首をこね、右手で勃起を刺激する。指を筒状にして上下させると、ユタカの体温はすぐに上がった。

「かわいいよ。ユタカは乳首も大好きだったね」

人差し指がカウバーで濡れる。親指を使ってそれをずるむけの亀頭に塗り込めると、ユタカが背を反らした。イク直前の癖だ。

「もう出るのか？ 早いな」

わざと笑ってやると、ユタカの全身がぴくんと跳ねた。正嗣にかからぬように左手で亀頭を覆い、右手で残滓を搾り取る。

失声症ゆえの、静かな絶頂だった。荒い呼吸音だけが聞こえる。

「上手に出せたね、偉かった」

ユタカのこめかみにキスを一つ。それからウエットティッシュでペニスと手を拭う。

久しぶりの射精で疲れた様子のユタカを隣に寝かせたら、次はお預けに耐えた正嗣の番だった。

「正嗣、ペニスを出さない」

正嗣はその場で膝立ちになると自分の手でズボンと下着を下ろした。

「勃起を見られて嬉しいよ。こちらに來なさい」

床を指しながら命じると、膝でしっかりと歩み寄ってくる。一步進むごとに立派なペニスが上下に揺れた。

正嗣は清瀬の足の前で動きを止めた。

「いいこだ」

犬を褒めるように顎を撫で、その手を清瀬自身の膝の上に仰向けで置く。

「この手にこすりつけて射精しなさい」

しかし正嗣の視線は、清瀬の手のひらからわずかにずれていた。

「……ご奉仕してくれるのか」

ファスナーを下げ、下着からペニスを取り出す。ケアをする相手が二人に増えたことで抜く余裕のなかったそれは、すでに先端が濡れている。

正嗣の喉が動いた。じっと、「よし」を待っている。

「舐めたければ、まずはにおいを嗅ぎなさい」

隣から寝息が聞こえた。腕を伸ばし、射精で疲れたユタカの体にブランケットを掛ける。

その間、正嗣はじつと清瀬のペニスを見つめていた。しかしどうやら清瀬の手が空くのを待っていただけのようで、清瀬が体を正面に戻した瞬間に正嗣がずいと体を前に傾けた。

すんすんと音が聞こえるほど、正嗣は必死ににおいを嗅いだ。表情を恍惚とさせ、幾度となく唾液を飲み込

んでいる。

「舐めなさい」

頭を撫でながら命じると、正嗣は清瀬のペニスにむしゃぶりついた。あふれんばかりの唾液を亀頭からめ、にじみ出るカウパーと混ぜてから飲み下す。いいところを探るように動いていた舌は、裏スジに狙いを定めてこねくりまわした。

「ああ……上手だよ。正嗣はフェラチオが好きだったんだね」

返事はなかったが、飢えた目が清瀬を見上げていた。  
「しつかりと味わって舐めなさい」

あまりもちそうになかった。しかし、今は正嗣の心を満たしたい。

清瀬は正嗣の頭を撫でながら射精欲に耐えた。

「……正嗣、自分のペニスをいじりなさい。だが私がいくまでイッてはいけないよ」

ソファに置かれていた正嗣の右手が動いた。むき出しになっていたペニスをしごき始める。しかしその手はすぐに止まり、少しするとまた動き出す。

(……かわいい)

正嗣の健気さに清瀬の胸が高鳴る。

「すぐにイきそうなんだね」

正嗣の最後の射精がいつだったのかはわからない。勃起不全になっている間はおそらく射精欲はなかったのだろうが、その頃の分も今、反動となって現れている可能性は多いにあった。



「射精したければ、私の亀頭を吸いなさい」

啞えたまま口を離そうとしない正嗣に告げると、すぐに亀頭を吸引された。

「まだ我慢だよ。私が射精をしたら、ペニスに精液をかけてかまわない」

ペニスを包む粘膜が一気に熱を帯びた。舌にもさらに力が入り、指と遜色ない力加減で裏スジをこねられる。

「ああ……気持ちいいよ」

じゅぼじゅぼと音を立てながら、正嗣が口をすぼめて頭を動かす。歯を包んだ唇がカリに引っ掛かる度に射精欲が沸き上がった。

「出すよ」

正嗣が動きを速めた。吸引も強くなる。

「っ——」

白濁で正嗣の口内を汚す。目を閉じて余韻に浸っていると、ゆっくりと正嗣が顔を動かし、尿道の残滓を搾った。

頭や耳を撫でると、正嗣はようやく顔を離した。どうやら精液はまだ飲み込んでおらず、口の中にあるようだった。

「吐き出しかまわないよ」

しかし、清瀬が差し出したティッシュを正嗣は首を振って拒んだ。そのまま自身のペニスをしごき始める。

「……私の精液の味をオカズにしているのか」

返事はなかったが、清瀬を見る目は認めていた。

かわいい。

「いくときは私のペニスにかけなさい」

その後、正嗣はきちんとそこを清めるだろう。その時にティッシュを使うのか、それとも口を使うのかを知りたかった。

正嗣の呼吸が激しくなる。床を見ると、フェラチオの間に滴らせていたらしいカウパーの水溜まりができていた。

「まるで射精したみたいだな」

ティッシュを取る。正嗣に、部屋を汚したという意識は植え付けたくない。叱られるかもしれないと怯えさせたくない。

「偉いな。ちゃんと我慢できた証だ」

褒めながら床を拭い、背中をソファに戻す。

ゴクンと正嗣の喉が鳴った。開いた口に粘りけが見える。

「イきますっ……」

「最後までしっかり出し切りなさい」

正嗣が勃起を清瀬の陰部に寄せた。

「はっ……」

ゼリー状に固まりつつある黄色い精液が、清瀬の半起ちの亀頭に山盛りになった。

「ああ……これはすごいな。硬かっただろう」

「は、いっ……」

正嗣の息はまだ上がっている。

「尿道を広げられるような感覚があったんじゃない

か？」

「すごかった……です」

頭が回っていない感じが愛らしかった。

「そうか。貴重な精液を見せてもらえて嬉しいよ。これを出すと、普通の精液を射精するのでは満足でなくなる」と聞くが――」

「……はまってしまいそうです」

「そうか」

しかし、こんなになるまで射精できず、つらかったことだろう。清瀬もプレイ相手に貞操帯を使って月単位、年単位で勃起そのものを封じたことはある。しかしプレイではなく精神的ダメージで射精できないことのつらさは計り知れない。

「これまで……本当によく頑張ったね」

固まった精液を舐めさせたくはなかった。過去を意識させるのはこれで最後だ。

清瀬がさっとそれを拭い捨てると、正嗣は泣きそうな顔で、けれどほっとしたように体から力を抜いた。

### 三人目の用意

「正嗣、ユタカからのプレゼントがあるよ」

清瀬はそれに触れたくない。正嗣を呼んで意識をユタカに向けさせ、ミミズを掴んで岩場を進むユタカの背中を見守る。

正嗣はユタカに礼を言って、釣り針にそれを取り付けた。ユタカは、正嗣がそれを川面に投げるのを隣で見ている。

正嗣の初めての射精から一か月が過ぎていた。この間、ユタカは週に二回のペースで射精し、正嗣はユタカが寝ている夜中に一度だけ射精していた。

（やはりネコがいた方がいいか……）

正嗣はタチとしての意識が強い。清瀬への奉仕はよく視線だけでねだってくるが、自身はオナニーで抜くよりも射精管理されることを好んでいるようだった。それならネコを用意してやった方が、正嗣にとってはいいだろう。

しかし、それもケアの一環だ。正嗣を傷つけるようなネコではない。だがSである必要がある。

一方で、清瀬はSが好きではない。それが引つ掛かり、正嗣のことを思いながらも今後のことを決めかねていた。

「旦那様」

顔を上げる。正嗣が心配そうな表情で、地面に座ったままの清瀬を見ていた。

「ああ、どうした？」

「大丈夫ですか」

正嗣の視線が清瀬から外れた。そちらを見る。清瀬のすぐ目の前に、もぞもぞと動くミミズがいた。

（略）

S M  
ルーム

寝る時は、ユタカ、湊、正嗣、清瀬の順番だった。ユタカと正嗣は湊の方を向き、清瀬は背後から正嗣を抱きしめる。

たまにユタカと正嗣が逆になることもあったが、二人が湊の方を向いて眠ることは変わらなかった。

正嗣の背を抱いて三人が眠りに落ちるのを待っていた清瀬は、携帯の一瞬のバイブを聞き取り、そっと寝室を出た。

「何時だと思ってる」

苦情を伝えながら書斎のドアを閉める。

藤島の悪びれもしない返事。

『悪い。けど昼間に電話したって出ないだろう』

「忙しいんだ」

『今三人は？』

「仲良く寝てる。今日も朝から三人で遊んでたからな。疲れたんだろう」

『遊んでたって――』

「ご奉仕プレイ。正嗣とユタカは貞操帯で勃起もできないが」

『もう射精管理まで始まっているのか。まだ湊が行って二週間だぞ』

「じゃあ正嗣とユタカは二週間勃起していない」  
ウイスキーをグラスに注ぎながら、昔からの悪友に

湊が来てからのことを話す。正嗣とユタカはスクールの卒業生かつ落ち着き始めているのを知っていたからか、藤島の関心は在校生である湊に向けられているようだった。

『それで、Mなのか』

「今のところ、Mの素質もあると思ってる。二日に一回、俺と二人でプレイしているが……まあそれを受け入れている時点でMだろう」

その時、小さなノックが聞こえた。笑っていたら聞き逃してしまっていたであろう遠慮がちな音。

「また連絡する」

電話を切ってドアを開ける。湊だった。

「怖い夢でも見たか」

「いえ……」

湊はうつむきがちに首を振るだけで理由を話そうとはしない。

「いつもの部屋に行こう」

書斎には今いる三人のものだけでなく、これまでにきた子たちの情報がある。

廊下を歩きながら湊の様子を観察する。正嗣やユタカから何かをされたような様子はない。

「二人は？」

「寝てます」

湊は昨夜、清瀬とのプレイで射精をしていた。今日の昼は正嗣とユタカに二回射精させてもらっているのので足りていないわけではないはずだが、なんとなく湊の

飢えを感じたような気がした。

普段、二人きりのプレイに使っている部屋を通り過ぎる。

「あの、どちらに？　いつもの部屋はここじゃー」

「おいで。違う部屋を見せてあげよう」

二つ隣の部屋。そこに本格的なS M器具や檻、大型什器が置かれている。

ドアを開けると、湊は目を見開いた。

「え……」

「私はSだからね。正嗣もユタカもこっち系のMではないからこの部屋は見せていない。不安にさせるから」

言外にこの部屋のこととは秘密だと伝える。

「……ではどうして僕に」

「考えてごらん」

言いながら中に入る。湊も後に続いた。

什器を使うようなS Mプレイと比較すると、湊が求める奉仕プレイなど遊びのようなものだ。

「……すごい」

湊が引き寄せられるように什器の一つに寄った。X字枷。立ったまま両手両足を開いて拘束するためのもの。

スクールにも同じ系統のものはあるだろうが、清瀬は海外からも取り寄せていた。安全基準を満たしながら、外見が日本のものよりもハードなものたち。

「どれが一番きれいだと思う？」

「きれい……」

つぶやいた湊は、隣の開脚診察台に視線をやった。しかしそちらには近づかず、それを通り過ぎて大小二つの穴が開いた簡易ベッドの前に立つ。

「それはうつぶせで顔とペニスを出すための穴だ。手足を拘束してペニスをいじる。そのいいところは、対象者にとって視界に映るものが床しかないということだ。何をされるかわからない無防備な姿で、このリノリウムの床を見つめていることしかできない。シミや汚れを数えて気を紛らわせることもできない」

離れてはいるが、湊の興奮が高まっているのがわかった。湊が魅せられたようにフラフラと部屋の中を歩く。

「それはバキュームだ。乳首やペニスを強い力で吸引する。だが一番楽しいのは陰囊の吸引だよ。相当な苦痛を伴うが、慣れるとそれだけで射精する子もいる」

苦痛に慣れると射精する。つまり慣れるまで使われ続けるということだ。そのことに湊が気付いたかどうかはわからない。

「これは何ですか」

「ギロチン拘束台だ。ギロチンといっても刃はないよ。その板をまたいで座り、板に開いた穴からペニスと手首を出す。形が特殊な拘束什器だ」

湊がギロチン台にそっと触れた。

「それが一番きれいだ」

ほこり汚れに対するきれいの意味ではないことに、湊はもろろん気付いている。



どれが一番――どの器具を使われている姿が一番美しいか。たとえそれを使うことで相手が鼻水や排泄物を垂れ流したとしても、美しさは増すばかり。

くく略くく

その夜、そろそろ寝ようかとトイレを済ませた清瀬のもとに、素肌をさらしたユタカが飛び込んできた。

「旦那様！」

ノックもなく入ってくるなどこれまでなかった。

何事かと、一瞬で体が熱くなった。

「どうした」

「正嗣さんが！」

ユタカが廊下を走り出した。背中を追って、清瀬も三人の部屋に飛び込む。

ベッドに湊と正嗣が座っていた。

湊は呆然として、正嗣は痙攣するように全身を震わせている。

「正嗣！」

何があったのかはわからなかった。しかし、何か起きたのだ。

考えるより先に体が動き、正嗣を抱きしめた。

「正嗣……正嗣」

きつく抱きしめ、名前を呼ぶ。清瀬の全身に正嗣の震えが伝わってくる。

しかし湊の様子も気になっていた。

「どうした？ 何があった」

湊が泣きそうな顔で清瀬を見返した。

そういえば、正嗣と湊も服を着ていない。三人とも裸ということ、プレイ中だったのだろう。

「あの」

言葉を発したのはユタカだった。

「うん」

正嗣の震えは止まらない。頭を包み、背中を撫でる。

「湊さまの手が、正嗣さんの頬に」

わざと叩くような子ではない。おそらく偶然ぶつかってしまったのだろう。しかし正嗣にはトラウマをえぐるトリガーになってしまった。

「そうか」

湊を責めるつもりはなかった。誰も悪くない。

「申し訳……」

謝る湊の声が震えていた。

「わざとじゃないんだろう？」

目に涙を浮かべる湊の肩をユタカが抱いた。

「体の向きを変える時に、偶然頬に」

ユタカの言葉は、清瀬の想像したとおりだった。

「うん、湊がわざと叩くような子じゃないことは知っているよ——正嗣、驚いたね」

きっと正嗣も、故意ではないと頭ではわかっているはずだ。ただ体を制御できていないだけ。

体を離して正嗣を見る。視線は交わらない。気を失っているわけではないが、意識がここにはないことは明らか

かだった。

くく略く

「ご主人様。ご奉仕をさせていただきます」

読書に飽きたらしい正嗣が、四つん這いで清瀬の許可を求めた。

「ああ。どうぞ」

頭を撫でてペニスを取り出すと、正嗣は嬉しそうな表情で顔をうずめる。

清瀬もそんな正嗣を見つめるべく、持っていた文庫本にしおりを挟んだ。

射精を目的としなくても、正嗣は度々フェラチオをねだった。口に咥えていると安心するのだという。

それがよかったのか、春を過ぎた辺りから、正嗣はまったく熱を出さなくなった。ここへ来て一年。ようやく心が落ち着いたのだ。

だから、そろそろ頃合いかと考えていた。正嗣の求めるSM——清瀬の好みになりたいという願望。

「正嗣」

龟头を咥えたままの正嗣が清瀬を見た。

「ちよっと部屋を移ろうか」

正嗣が不思議そうな顔でペニスを放した。

もう一度頭を撫で、ペニスをズボンにしまってから手をつなぐ。

「怖かったら、怖いと言いなさい」

「ご主人様？」

正嗣には、まだ一度もS Mルームを見せたことはなかった。最後に使ったのは湊がいた時。清瀬も、掃除以外には足を踏み入れていなかった。

開錠してドアを開ける。

中を見た正嗣の手が一瞬ピクリと跳ねた。

「正嗣」

優しく呼ぶと、ゆっくりと視線が交わった。

「怖ければいいんだ」

「……いえ」

「じゃあ、入ろうか」

今日は見せるだけのつもりだった。この部屋の中で正嗣の心が平穏を保てそうだったら、器具に腰掛けてフェラチオをさせる。それだけで、什器を稼働させるつもりは一切ない。

手をつないだまま部屋の中央まで進む。

正嗣の手のひらがしつとりと汗をかいていた。

「無理はいけないよ」

「……いえ」

近くにあったX字枷に目を向ける。

「どれも、過去に私が使ったものだ。Mネコを拘束し、きつい愛撫やお仕置きを施した」

意識をつないだ手に向ける。震えてはいない。だが、握る手には力がこもっていた。

「私の好みになりたいと言ってくれたね」

「……はい」

「いいこだ。嬉しいよ」

頬を撫で、唇を合わせる。目を見ると、正嗣の瞳が揺れていた。

「よく頑張ったね」

「……え？」

「この部屋は、見る者を圧倒させる。怯えて入れない子も多かった。けれど正嗣はちゃんと入れた」

「入っただけです」

「そんなことはない。それが大事なんだよ」

「いえ……ご主人様はどの器具が一番好きですか」

「どれも好きだよ。器具を使わずとも、ハンブラーをつけて中央のスペースを四つん這いで歩かせるのも好きだ」

「ご主人様の好きなブレイをしてください」

絞り出したような声だった。その健気さが愛おしい。

「——うん。そうだね。だが、檻には入れないよ。あれは使わない」

「いえ、ご主人様なら大丈夫です」

「だめだ」

きっぱりと言い切ると、正嗣は弾かれたように口をつぐんだ。怯えさせたことを詫びるように背中に腕を回す。

「それに、檻よりも他の什器の方が好きだ。まあ、Mネコ用だからあまり正嗣に使えるものは多くないが」

拘束セックス向けのものばかりで、単に拘束する体勢が違うだけのものが多かった。

「拘束台と……そうだな、診察台も使ってみようか。足を開いて私に見せるのは抵抗があるかな」

「……ご主人様、なら……」

「ありがとう。嬉しいよ」

お仕置きをするのではなく、愛し合う二人のプレイなのだ。強引に進めるつもりは毛頭なかった。

「さあ、寝室に戻ろうか」

「え——」

「ん？」

「しないんですか」

「まだ動揺しているだろう」

「いえ。……いや、少し、しているかもしれませんが。でもご主人様の秘密の部屋に入れていただけて、高揚もしています」

「……正嗣は本当にかわいいね。心身共に捧げてもらえて、嬉しくてたまらないよ」

頬を撫で、唇を重ねる。舌を差し込むと、正嗣がそつと舌をからめた。

「……おいで」

手を引いて、ベンチのような拘束台に座らせる。通常の椅子よりも低いものだ。その前に立ち、ペニスを出す。

「ここで舐めなさい」

「はい」

正嗣を拘束はしていない。ただ椅子がわりに座らせてただけだ。それでもSM什器に触れたという経験が後に活きる。

正嗣の口内は先ほどよりも熱くなっていた。唾液にも粘り気を感じる。

「うん、上手……そう、気持ちいいよ」

頭を撫で、安心できるように褒め続ける。

「そこを……ああ……すごくいい」

そろそろ射精したいと思った時、正嗣が顔を離した。珍しい行動に、慌てて体を引く。

「どうした？ 怖かったかな」

「いえ——ご主人様は、ディープスロートはなさらないんですか」

「……嫌いではないよ。だが——」

喉を犯すと、征服欲も快感も満たされる。しかし窒息させる恐れがある行為だ。簡単にやらせるわけにはいかない。

「してください」

「経験は？」

「学校でデイルドで習いました。それから職場でも毎日」

「しない」

習っただけなら試したかもしれない。しかし前の職場でされていたことを、正嗣にしたいとは思わなかった。

「記憶を……塗り替えてください」

「正嗣——」

「ご主人様の好みになりたいんです。ご主人様の好きなプレイをすべてしてください」

ハピエンです！

7万3千字です。

よろしくお願いいたします……！

セクシャルスクール スピンオフ

ヒーリングプレイス サンプル

@gooneone (ごーわんわん)

2025/12/25

メール:gooneonegooneone@gmail.com

pixiv : 19591291

Twitter:@gooneone11

商業情報は『リットリンク gooneone』でご検索ください。

本書の無断複写・転載・複製を禁じます。

※この作品はフィクションです。

実在する人物、団体等とは一切関係ありません。